

鬼の愛

沖繩がまだ琉球王国だった頃のお話です。  
海辺の岩の上で、二人の男があぐらをかいて向き合っていました。ひとりはこがらですが、もうひとりは大きな男で、真冬の寒い時期なのに、はだかで腰に布をまきつけているだけです。  
この男の頭には、つのが二本はえていました。タラーというその男は、まっかな顔をつらそうにゆがめて口をひらきました。  
「自分が鬼になるなんて思ってもみななかった。心まで鬼になると、あばれまわって、人に乱暴したり物をうばったりするのが楽しくてたまらない。血を見ると、わくわくするほどだ。だが、人間の心にもどって自分がやったことを思い出すと、最悪の気分になる」  
こがらな男サンラーは、変わり果てたタラーの姿に声も出ません。  
「今は心だけでも時々人間にもどれるときが

あるが、そのうち、心も完全に鬼になってしま  
うだろう」

タラーはそう言って、サンラーの目をみつ  
めました。たとえ鬼になっていようと、その  
目だけは昔ながらの幼なじみの目でした。

「俺は、このまま鬼として生きていくつもり  
はない。完全に鬼になる前に死ぬつもりだ。  
ただし、意味のある死に方をしたい」

タラーは、サンラーの肩をつかみました。

「そこでおまえに頼みがある。妹のナビーの  
ことだ。俺が鬼になってしまったことで、あ  
いつもまわりから白い目で見られているだろ  
う。どうせ死ぬのなら、あいつのためになる  
ようにしたい。協力してくれ」

帰り道、サンラーはタラーから聞かされた  
計画を思うと、涙が出そうになりました。

サンラーはナビーの家に寄ると、タラーに  
会ってきたことを話しました。

「タラーには、まだ人間の心が残っている」  
「ほんとに」

うつむいて聞いていたナビーが、顔をあげました。

「ああ、だけど、もうすぐ完全に鬼になってしまおう。言いにくいことだが、その前に殺さなければならぬ」

ナビーの顔が青ざめました。

「そんなこと、できないわ」

「本物の鬼になる前に殺さないと、殺せなくなる。本物の鬼になったら、今以上に悪さをするだろう」

ナビーは泣き出しました。

しばらく泣いてから、ナビーも心を決めました。

翌日、ナビーとサンラーは、タラーの好物のムーチーをいっぱい作りました。香りの良い月桃げっとうの葉でつつみ、むしたモチです。

半分は普通の甘いモチ。もう半分は平たい石をモチでつつみました。

そして、サンラーはタラーから聞いた時間に、ナビーをつれて海辺のどうくつに行きま

した。そこはがけになっ  
ていて、がけ下には  
荒い波が打ち寄せて  
います。  
「兄さん」  
ナビーが声をかけると、  
タラーがどうくつ  
の中から顔を出しました。  
「おう、ナビーか、久し  
ぶりだな」  
鬼になっても妹がわか  
るのか、それとも、  
今は人間の心にもどっ  
ているのか。サンラー  
はタラーと目を合わせた  
ものの、その心をよ  
みとることはできません  
でした。  
ナビーは、鬼になった  
タラーと会うのは初  
めてです。その顔つき  
のおそろしさに、思わ  
ず息をのみましたが、  
それでも無理して笑顔  
を作りました。  
「兄さん、今日は寒い  
から、あたたかいム  
チーでもいっしょに食  
べようと思って、持っ  
てきたの」  
そう言って、ナビーは  
ムチーの入ったか  
ごを差しだして見せ  
ました。  
「おお、これはうま  
そうだ」

三人は岩の上にすわり、月桃の葉を広げました。むしたての香ばしく甘いにおいがただよいます。

ナビーとサンラーは普通のやわらかいムーチーをむしやむしやとたいらげました。しかし、タラーに差しだしたムーチーは、石が入ったものです。鬼といえど、石をかみくだくのは容易ではありません。

タラーはふしぎそうな顔で、ナビーとサンラーを見つめました。そして意地になって石の入ったムーチーをかみくだいたので、タラーの口からは血があふれだしました。

「兄さん、どうしたの。まだひとつしか食べてないじゃない。あんなに好物だったのに」

ナビーがそう言うと、タラーは聞き返しました。

「どうして、こんなかたいものを、女のおまえが簡単に食えるんだ」

「まあ、これがかたいんですか。こんなにやわらかいのには」

ナビーは、もうひとつムーチーを取りだすと、むしゃむしゃと食べ始めました。そして、大きく口を広げ歯をむき出しました。

タラーはおどろいて、立ち上がりました。ナビーの口に大きなきばがはえていたのです。サンラーの作ったにせ物のきばですが、タラーは気づきません。

「おまえ、そのきばはどうした」

「兄さんが鬼になってから、はえてきたんです。お坊さんに聞いたら、これは、鬼を食い殺すためのきばですって」

ナビーはそう言って立ち上がると、にっと笑いました。

タラーは恐れおののいて、後ずさりしました。ナビーがそのまま前に出てくると、どんどん後ずさり、とうとうがけっぷちに追いつめられませんでした。

「た、たすけてくれ。あー」

タラーは悲鳴をあげながら、がけ下に落ちていきました。

ナビーとサンラーはがけ下をのぞきこみま  
したが、タラーの体はすでに波にさらわれて  
見えません。  
「ああ、兄さんを殺してしまった」  
泣きくずれるナビーを、サンラーが抱きと  
めました。  
「ちがう。あれは、タラーじゃない。あれは  
もう鬼だ」  
そう言いながら、サンラーは考えていまし  
た。タラーは鬼になっていたのか、それとも  
人間にもどっていたのかを。  
心まで鬼になっているときの自分はばかだ  
から、簡単にだませるはずだ。もし、鬼にな  
ってなければ、ばかなふりをしよう。前の日、  
タラーは、そう言ったのです。  
でも、サンラーにはどっちなのかわかりま  
せんでした。  
ナビーが鬼を退治したというわさはすぐ  
に広まり、村の人たちは、また今まで通り、  
笑顔でつきあってくれるようになりました。

タラーのねらい通りでしたが、村人たちのあまりにも単純な変わりように、サンラーはいい気持ちがありませんでした。

それから一年後、ナビーとサンラーは夫婦になりました。

ナビーの家はもともと大きな地主の家で、人をたくさん使っていました。ナビーはやさしくて、使用人に無理をさせず、困っている人には食べ物やお金もあげるほどでした。

そんなナビーが、子どもが出来てから少しずつ変わってきました。使用人にきびしくなり、貧しい人に親切にすることもなくなりました。

「いくらうちがお金持ちでも、今まで通りやっていたら、この子が大きくなるころには貧乏になってしまおうわ」

ナビーのその言葉に、サンラーはちよつと悲しくなりましたが、母親というのはそういうものかもしれないと思い、何も言いませんでした。

そのうち、ナビーはお金を貸して高い利子をとることまで始めました。タラーが昔やっていたのを、そばで見て覚えていたのです。ナビーは情けようしやなく、お金を取り立てました。

「いくらなんでもやりすぎじゃないのか」

サンラーもさすがに注意しました。

「そんな甘いこと言ったら、誰も貸した金を返してくれません。第一、私はこの子のためにやってるんです。悪いことをしているわけじゃありません」

ナビーの怒った顔はまるで鬼のようで、サンラーはぞくつと背筋が冷たくなるのを感じたほどです。

その晩、サンラーが目をさますと、月の光が部屋の中にさしこみ、ナビーの顔をてらししているのが目に入りました。何げなくその顔を見ていたサンラーは、驚いてとび起きました。

ナビーの髪の毛が二カ所盛り上がっている

のです。恐る恐るその部分をさわると、何かかたい物が髪の下にあります。

サンラーが絶望のため息をもらした時、ナビーが目をさましました。

「あなた、どうしたんです」

「自分の頭をさわってごらん」

ナビーは言われるがまま、頭を手でさわると、まっ青になりました。

翌朝早く、二人はお寺へ行き、おしよさんにごぶを見てもらいました。

「まだ大丈夫だろう。今、心を改めれば」

おしよさんの言葉に、ナビーは不服そうでした。

「いったい、どう改める必要があるんですか。私は何も悪いことはしていません」

「タラーもそう言ってたわい」

「兄さんが」

「ああ、タラーもあんなためにと行って、金貸しを始め、むごいとりたてまでやった。そのうち、それが楽しくなくなったみたいだ。あ

んたも、それがほんとに子どものためなのか、よく考えてみるんじゃない」

お寺からの帰り道、思いつめた顔をしているナビーに、サンラーはぽつりぽつりとタラーがたてた計画のことを話し始めました。

「何ですって。じゃあ、あれは、兄さんから言い出したことなんですか」

「そうだ。タラーは最後までおまえのことを気にしていた。鬼になっても。でもな、他の人を傷つけながら、妹のためとか、子どものためとか言っても、そんなのは鬼の愛でしかないだろう」

ナビーはその場に泣きくずれました。

翌日、二人はムーチーを作ると、タラーが落ちたがけまで持っていき、祈りをささげた後、海に放り投げました。

落ちていくムーチーをみつめながら、ナビーの目には涙があふれ、いつしか頭のコブも消えていったのです。